

言葉との邂逅

旅をする木 星野道夫 文芸春秋

無数の人々とすれ違いながら、
私たちは出会うことがない

人生の意味を、どこまでも深く
見つめる、透明な感性。

それは、自分の死期をも予感す
るのだろうか。

そして、自分の死の形をも予感
するのだろうか。

アラスカの自然と動物を撮り
続けた写真家、星野道夫。

彼は、かつて、あるインタビュ
ーに対し、こう答えている。

「熊に人が襲われた記事を読
むと、少しほっとするのです。

まだ、そんな自然が残っている
ということなのですから」

この言葉が予感したことく、星
野は、このインタビュ어의翌年、

カムチャッカを取材中、熊に襲
われ、その生涯を閉じた。

しかし、その事実を知るとき、
なぜか、心に浮かぶのは、「非
業の死」という言葉ではなく、

「彼は、すでに生を全うしてい
た」との思いである。

それは、彼が写真家としての活
動の傍らに残した、数多くの著

作を読むとき、いつも、心に浮
かぶ思いでもある。

「無窮の彼方へ流れゆく時を、
めぐる季節で確かに感じるこ

とができる。自然とは、何と粋な
はからいをするのだろうかと思

います。一年に一度、名残惜しく
過ぎてゆくものに、この世で何

度めぐり合えるのか。その回数
をかぞえるほど、人の一生の短

さを知ることはないのかもしれ
ません。アラスカの秋は、自分

にとつて、そんな季節です」

「人生はからくりで満ちてい
る。日々の暮らしの中で、無数
の人々とすれ違いながら、私た
ちは出会うことがない。その根

源的な悲しみは、言いかえれば、
人と人が出会う限りない不
思議に通じている」

「旅をする木」の中に書かれて
いる、これらの言葉。

それは、「人生の短さ」を思い、
その「一瞬の人生」において、

人が巡り会うことの不思議を語
っている。

しかし、彼の文章を静かに読み
続けるとき、彼が「個としての

死」を超えて存在する「永遠の
生命」を見つめていたことが伝
わってくる。

我々は、その「永遠の生命」か
ら生まれ、しばし、この地上で

「個」としての生を営み、そし
て、還っていく。

星野の透明な感性は、そのこと
を見つめていた。

そして、それゆえにこそ、彼は、



この地上で人と人とが巡り会う
ことの不思議と奇跡を、誰より
も瑞々しく感じることができ
るのである。

そうであるならば、
彼は、すでに生を全うしていた。

では、いずれ「永遠の生命」に
還っていく我々が、なぜ、「個

としての旅」に出たのか。

その問いこそが、彼が問い続け
た「永遠の問い」。

我々もまた、その問いを抱き、
この旅を続けていく。



田坂広志

多摩大学教授 ソフィアバンク代表

BOOK